

違いに学び、知るから始まる、学び合う教室へ

滋賀大学教育学部附属中学校

舟橋 秀晃

一 「優劣のかなた」を心がける

本誌25号の巻頭エッセイ「虚心坦懐に聞く耳を」（三宮麻由子、p1）には、はっとさせられた。未読の方のために冒頭のみ記すと、「ある中学校で特別授業をした後、生徒の感想が送られてきた。ところが、そのほぼ全部が『感想』ではなく『評価』の文章だったの愕然とした」そうである。本校でもその傾向があり、決して他人事とはいえない。

どうすれば虚心坦懐に聞く耳が育つだろうか。それにはやはり、大村はまの言うように「学びひたり／教えひたろう／優劣のかなたで。」（自作詩「優劣のかなたに」）を心がけるしかない。誰、あるいはどこが優れているとか劣っているなどということに気を配る暇などなく必死に学習に取り組む雰囲気こそ、四〇人もの生徒が同時に学ぶ日本の教室で、四〇人の力を最大限引き出すのに、何よりも

まず大事なことはないか。

二 「違いに学び知るから始まる」とは

国語の教室は特に、安心して自分の声を出し、その声を互いに受け止め合える空間にしたい。そうでなければ生徒は優劣を気にし、牽制し合い、互いに同調を強いて、言葉を発しなくなってしまう。私は近年、大村の言葉を自分なりに咀嚼して、授業開きから年中ことあるごとに「互いの『違い』に学べ」「知ることは学習のまだ入口だ」と生徒に言い聞かせている。

三 班交流に注文、笑いに切り返す

とはいえ、言うだけでは浸透しない。そこで、四月のできるだけ早い段階から四人程度の学習班での意見交流を仕組む。牽制や同調から、生徒は決まって、互いの共通点をまと

めれば話し合いをやめる。そこで「自分だけの発見や、他の誰かさんだけの発見、また互いの相違点も見つけ、その差の由来をこそ話し合え」と注文をつけ、話し合いを促す。

また、授業ではともすると、級友の失敗が笑いの種にされがちである。その教室で起きるそんな笑いの初回を絶対に見逃さず、「できないことに挑むのが学校、失敗は笑うな！それより、面白かったのは日本語のどの点？」と間を置かず切り返し、関心の対象を友の失敗から日本語のありようへ振り向け、かつ自分の無知を自覚させるようにもしている。

この指導をその後も浸透するまで繰り返すことで、指導者の本気度が生徒に伝わる。

四 交流があり笑いのある活動例

以上から、優劣が気にならず、生徒間の交流が促され、明るい笑いの起きる活動が特に春には好ましい。例えばこんな活動がよい。

- ・ 広告のキャッチフレーズを分類↓型をまねたフレーズを自作し自分の名刺に入れる
- ・ 校庭を散策し春の一品をごく簡単な水彩画に↓シヨウアンドテル式で絵手紙スビーチ

楽しい活動をぜひ工夫したいものである。

ふなはし ひであき 日本国語教育学会理事。全国大学国語教育学会会員。国立教育政策研究所「評価規準、評価方法等の工夫改善に関する調査研究」協力者。